

## 緒方富雄先生とエスペラント

戸田 清

故緒方富雄先生（一九〇一～八九）のあまり知られていない側面として、エスペラントとのかかわりについて、若干紹介してみたい。エスペラントというのは、いうまでもなく、ポーランドの眼科医、ラザルス・ルートヴィヒ・ザメンホフ（一八五九～一九一七）が一八八七年に発表した人工国際語である。

まず、『日本におけるエスペラント医学文献目録』（以下、『目録』と略す）に記載されている緒方先生の文献を記す。  
〔五 細菌学・寄生虫学・衛生学〕の項には、次の二篇が記されている。<sup>(1)</sup>なお、『目録』には和文表題が記されていないので、原典で確認した。

一 緒方知三郎・緒方富雄 *Unu propono pri la formado kaj unuecigo de japanaj triyahomoj de parazitaj vermoj kaj la prononco de ilia terminoj latinaj kaj sia transliterado per japanaj literoj (kun ekzemploj.)* 「寄生蟲（蠕蟲類）の和名並に學名の發音轉寫に關する一提案」〔附、その實例〕『醫事新聞』二二三〇号、二〇九～二三八頁、一九二八（昭和三年）。

二 緒方知三郎・緒方富雄 *Pri japanaj tradukoj de la nomoj donitaj al la diversaj larvformoj de parazitaj vermoj dum sia disvolvado* 「発育期にある寄生蠕蟲の仔蟲に附せられた名稱の譯語について」『醫事新聞』二二三一

号、三〇九〜三一七頁、一九二八（昭和三年）。

いずれも、日本語原著に、エスペラント文抄録が付されている。なお、この二篇は、緒方富雄先生が医学部の卒業試験の直前（一九二五年）より、緒方知三郎・三田村篤志郎共著『病理學總論』上の卷（南山堂、一九二七）の執筆に協力していたことの副産物である。<sup>(二)</sup> ちなみに、『醫事新聞』には、La Iji-Sinbun (La Jurnal Medicina) というエスペラント文表題がついており、一九二三年八月から一九三〇年（終刊）までは、ほとんどすべての原著論文にエスペラント文抄録を付していた。<sup>(三)</sup> また、医学士東宮豊達著『醫家用エスペラント獨修書』（吐鳳堂書店發行）<sup>(四)</sup> や村田正太著『エスペラント獨修』（醫事新聞社發行、吐鳳堂書店發售）<sup>(五)</sup> の広告も載せていた。

『目錄』の「一六 術語集および文集」の項には、次の単行書が記されている。<sup>(六)</sup>

緒方知三郎・三田村篤志郎・緒方富雄『病理學總論』中の卷、一九三一（昭和六年）および下の卷、一九三三（昭和八年）、南山堂。

中の卷・下の卷にはそれぞれ中表紙に「病理解剖學總論（上）」、「病理解剖學總論（下）」と記されており、この二冊は、一九六八（昭和四十三）年二月十五日に、発行者緒方知三郎として覆刻版（非売品）が発行された。その巻末には、「覆刻版にそえて」を知三郎・富雄両先生が執筆している（初版、覆刻版ともに、国会図書館所蔵）。

先ほど言及した上の卷（一九二七）と中の卷、下の卷には、医学術語脚注に、ラテン語、エスペラント、ドイツ語、英語の順で欧文が入っており、ラテン語は略されることも多い。例示すれば、次の通りである。

比較病理學 *Kompara patologio*; vergleichende Pathologie; comparative pathology <sup>(七)</sup>

副腎 *glandula suprarenalis*; *suprarenno*; Nebenniere; suprarenal gland <sup>(八)</sup>

青色症 *Cyanosis*; *Cianozo*; *Zyanose*; *Cyanosis* <sup>(九)</sup>

鬱血性の水腫 *Stagnada edemo*; Staunungsödem; Congestive edema <sup>(一〇)</sup>

上の巻の「自序」には、「エスペラント語の校訂」をしたのは村田正太氏（前出）、また、上の巻の「凡例」によると「エスペラント語」を入れたのは、「この語の将来の有用を豫期して入れてある」とのことである（ふつう、エスペラントと表記するのであるが、ここではエスペラント語と記されている）。

『目録』の「一八 原著者以外による抄録」の項には、先ほどふれたように『醫事新聞』でのエスペラント文抄録のことが記され、抄録筆者六名のうち、緒方富雄先生は二番目に多い一三三篇を書いている。(12) ちなみに、西成甫先生は四篇である。緒方先生によるエスペラント文抄録の付された原著論文を、若干例示しておく。

- 一 組織の反應に關する實驗的研究 第三報 細胞體內水素イオン濃度の研究、其の一、エントアマーバーヒストリチカ *Entamoeba histolytica Schaudinn* に就ての實驗（東京帝國大學 尾河順太郎）(13)
- 二 打診上炭酸瓦斯膨脹胃とレントゲンの胃との形態位置比較に就きて（慶應義塾大學 河合一郎・石川孝壽）(14)
- 三 ニーリ氏腎臟機能検査法の臨牀的價値に就て（長崎醫科大學 井口四郎）(15)

このうち、尾河論文と河合・石川論文については原著者による抄録のエスペラント訳であるが、井口論文の場合は緒方先生執筆のエスペラント文抄録である。

以上が文献的に確認できる緒方先生とエスペラントとのかかわりである。初芝武美氏のご教示によると、緒方富雄先生がエスペラントに関心をもたれたのは、緒方知三郎先生の影響であるという。(16)

叔父であり、東大病理学教室では指導教官であった緒方知三郎先生（一八八三〜一九七三）は、一九二四年に東京で医師のエスペラント組織 *Hipokratida Klubo*（ヒポクラテス会）の結成に参加し、エスペラント文の論文に、*Problemo pri la arifanuzo, Internacia Medicina Revuo, 1927, 4*（ビタミン欠乏症の問題）などがある。(17)

ちなみに『目録』に記載されている人名を若干例示すれば、次の通りである。井上清恒（生物学）、浦良治（解剖学）、

江上不二夫（生化学）、大内弘（解剖学）、忽那将愛（解剖学）、佐野豊（病理学）、高木和男（栄養学）、高木健太郎（生理学）、田所作太郎（薬理学）、中山知雄（解剖学）、西成甫（解剖学）、藤原元典（薬学）、八木日出雄（産婦人科学）、柳澤文正（生化学）、山極三郎（獣医病理学）、山添三郎（生化学）。この中で、少なくとも浦、江上、田所、中山、西、八木、山添各先生は終生もしくは現在もエスペラント界で活躍している。

西成甫先生（一八八五～一九七八）は、多くのエスペラント文の学会誌論文の他に、啓蒙書 *Nia Kopo*（人間のからだ）や、夏目漱石『倫敦塔』のエスペラント訳（Turo de Londono）などで知られるが、一九二〇年ごろ東北大在任中エスペラントを学習、一九二二年東大に医学者のエスペラント組織 *Eskulapida Kubo*（アスクレピオス会）を結成し、日本エスペラント医家協会（JEMA）・世界エスペラント医家協会（UMEA）・国際エスペランチスト科学者協会（ISAE）各会長、日本エスペラント学会（JEI）理事長などを歴任した。八木日出雄先生（一八九九～一九六四）は、UMEA・世界エスペラント協会（UEA）各会長などを歴任した。江上不二夫先生（一九一〇～八二）は、JEI会長などをつとめた。山添三郎先生（群馬大学）は、現在JEMA会長であり、またUMEAの機関誌 *Medicina Internacia Revuo*（医学国際雑誌）の編集長である。なお、最近発表した拙稿<sup>(111)</sup>でも、一九八七年にUMEAの機関誌に掲載されたオランダの研究者の原著論文を引用した。

緒方富雄先生については、六月十七日に御長男の緒方洪章氏（画家）にお尋ねしたところ、「父との会話でエスペラントが話題にのぼった記憶はない」とのことなので、中年以降はエスペラントを離れたのではないかと推測される。

エスペラントは文法が平易であるので、日本人にとっては単語の習得が大きな課題であるといわれている。単語の六割ほどはラテン語から取り入れたものなので、医師のエスペランチストが比較的多い理由のひとつに、語彙のなじみやすさがあるように思われる。

この紹介文の要旨は、一九八九年六月十七日、日本医史学会・蘭学資料研究会合同の緒方富雄先生追悼例会において発言した。

## 文 献

- (一) 日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編『日本におけるエスペラント医学文献目録』(以下『目録』と略す)二六頁、日本エスペラント学会、東京、一九五六(昭和三十一年)。
- (二) 緒方知三郎・三田村篤志郎・緒方富雄『病理學總論』中の卷、南山堂、東京、一九三一(昭和六年)の覆刻版、緒方知三郎、東京、一九六八(昭和四十三年)、所収「覆刻版にそえて」九〇、一三頁。
- (三) 『目録』四五頁。
- (四) 『醫事新聞』一二二七号、卷末の広告の頁、一九二八(昭和三年)。
- (五) 『醫事新聞』一二二八号、奥付の頁、一九二八(昭和三年)。
- (六) 『目録』四三〜四四頁。
- (七) 緒方知三郎・三田村篤志郎『病理學總論』上の卷、一頁、南山堂、東京、一九二七(昭和二年)。
- (八) 同、四七頁。
- (九) 緒方知三郎・三田村篤志郎・緒方富雄『病理學總論』下の卷、五六六頁、南山堂、東京、一九三三(昭和八年)。
- (一〇) 同、五六七頁。
- (一一) 同、九六八頁。
- (一二) 『目録』四五頁。
- (一三) 『醫事新聞』一二二七号、一頁、一九二八(昭和三年)。
- (一四) 『醫事新聞』一二二七号、一四頁、一九二八(昭和三年)。
- (一五) 『醫事新聞』一二二八号、七三頁、一九二八(昭和三年)。
- (一六) 初芝武美(日本エスペラント学会常務理事・蘭学資料研究会会員) 教示、一九八九年六月十七日。
- (一七) 田中貞美・峰芳隆・宮本正男編『日本エスペラント運動人名小事典』(以下『小事典』と略す)二七頁、日本エスペラント図書刊行会、大阪、一九八四(昭和五十九年)。
- (一八) Nishi, S., Nia Korpo; Anatomio kaj fiziologio de la homo por laikoj. la 2-a eldono, Gunma Esperanto-Societo,

Machashi, 1964.

- (一五) 『小事典』八二頁。
- (一六) 『小事典』一〇七頁。
- (一七) 桑原利秀・林稲苗編『三高エスベラント会小史』二二～三七頁、発行者林稲苗、愛知、一九七九(昭和五十四年)。
- (一八) 『小事典』二二頁。
- (一九) 戸田清「喫煙問題の歴史的考察」『科学史研究』第Ⅱ期第二七卷、一六七号、一三八～一五一頁、一九八八(昭和六十三年)。

(注) 文法的には、*ihai* が正しい。

(東京都目黒区)